

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 21 日現在

機関番号：20105

研究種目：基盤研究 C

研究期間：2010～2012

課題番号：22592379

研究課題名（和文）

看護教育における模擬患者養成プログラムの検証と模擬患者を支援するシステム構築

研究課題名（英文）

Evaluation of Training program for Simulated Patients and Standardized Patients (SPs) and Establishment of a System to Support SPs in Nursing Education

研究代表者

渡辺 由加利 (WATANABE YUKARI)

札幌市立大学・看護学部・講師 研究者番号：10310088

研究成果の概要（和文）：SP がスキルアップし継続的に活動するためには、教員は OSCE や授業時において SP の心身にかかる負担に配慮すること、SP が自己の技術を振り返るための定期的な学習会を開催すること、他機関の SP との交流および教員との交流の機会を設けることが効果的であることが示唆された。これまで、担当教員が中心となり SP を支援してきた。今後に向けて、大学の組織である教務委員会によって支援されるシステムを構築した。

研究成果の概要（英文）：

For SPs to improve their skills and continue their activities, teachers should consider the physical and psychological burdens on SPs in Objective Structured Clinical Examination (OSCE) and class lessons. Regular workshops should be held for SPs to develop their skills and to provide opportunities for SPs to communicate with their counterparts in other institutions and with teachers. In the future, SPs would be supported by the Academic Affairs Committee of the University.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：看護教育学・模擬患者・模擬患者養成・OSCE・模擬患者参加型授業

1. 研究開始当初の背景

日本において模擬患者（SP: Simulated Patient, Standardized Patient 以下 SP とする）は、医学・歯学教育の客観的臨床能力試験（OSCE: Objective Structured Clinical Examination 以下 OSCE とする）が必須化されたことから、問診や医療面接でのコミュニケーションの演習に対応するために養成されてきた。一方、看護教育では、文部科学省の看護学教育の在り方検討会（2004 年）

で看護実践能力育成や適切な評価が重要な課題として取り上げられ、SP を活用した授業に関する研究が年々増加傾向にあり、その効果も明らかにされてきている（佐藤・渡邊他：2009、大野他：2009、小林他：2009）。しかし、SP 参加による学習効果が明らかにされる一方、看護教育における SP の数と質の確保が課題となってきた（小林他：2009）。

札幌市立大学では、学生の看護実践能力の

向上を目的として開学年次（平成 18 年度）より看護学部全体で SP 参加型授業および OSCE 導入に取り組んできた。その過程で、「模擬患者」の確保が大きな課題となった。そこで、研究代表者らは平成 19 年度より学内の競争的研究費を獲得し、大学独自で SP の養成を開始し（図 1）、現在 25 名の一般市民が SP として活動をしている。

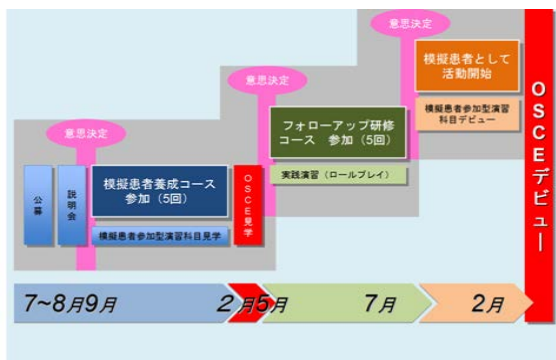


図 1. 模擬患者養成過程

SP に関するテキストやシナリオは医学分野のものが中心であり、看護教育において SP の養成を系統的に実施している施設や専門家はきわめて少ないことから、札幌市立大学における SP 養成は試行錯誤の中で実施してきた。SP を対象とした先行研究から（阿部恵子他：2007, 2008）、SP は活動を行っていく中で満足を感じている反面、負担とも感じていることが明らかにされている。看護教育と医学教育における SP の大きく異なる点は、看護教育においては問診や医療面接でのコミュニケーション演習の SP にとどまらず、SP が学生による看護援助行為を実際に受けることにある。SP は車椅子移乗や洗髪や足浴など身体に触れられ、時には吸い飲み等で水分を摂取することもある。身体侵襲性が低い看護技術項目が選択されているとはいえ、初対面の学生が身体に触れることや、血圧測定を 1 日に何度も実施されることは、更に身体的・精神的に負担をかけることが推察される。

2. 研究の目的

研究目的は、『看護教育における模擬患者（SP: Simulated Patient, Standardized Patient 以下 SP とする）養成プログラムの検証と模擬患者を支援するシステム構築』である。

(1) 模擬患者養成プログラムと授業・OSCE における SP への支援を検証するために、①看護教育において活動している SP 特徴を明らかにし、看護教育において SP を養成したり、活動を支援したりするために必要な要素を明らかにする②その結果から札幌市立大学で実施した養成プログラムおよび授業・OSCE 時の教員の支援について検証する。

(2) SP のスキルアップと継続した活動を支援するためのプログラムを検討する。

(3) (1) (2) の結果から、模擬患者を支援するシステムについて考察する。

3. 研究の方法

(1) 看護教育における SP の特徴を明らかにするため、看護教育と医学教育両方で活動している SP8 名にインタビューを実施し、内容分析を行なった。さらに看護教育で活動している SP の負担を明らかにするため、OSCE 後に自記式質問紙により主観的な評価を実施した。更に POMS (気分プロフィール検査) 日本語短縮版、および血圧・脈拍、唾液アミラーゼ (S-AMY) 値による生理的指標を OSCE 実施前後に行った。分析には、マンホイットニー U 検定、対応サンプルの t 検定を用いた。

(2) SP のスキルアップと継続した活動を支援ために学習会等を企画し運営した。その効果を学習会後の質問紙および年間の活動全体を評価した質問紙を用いて評価した。

(3) (1)(2) の結果から SP 活動を支援するためのシステムを検討した。

なお、調査は、札幌市立大学倫理審査委員会の承認をうけて実施した。

4. 研究成果

(1) 看護教育における SP の特徴

①看護教育における SP の特徴を明らかにするために、医学教育と看護教育機関で活動している SP にインタビューを実施した。分析の結果、看護教育と医学教育における SP としての体験の違いは、「期待」、「演技時の気持ちの動き」、「フィードバック時の不安」、「シナリオの深さ」であった。「看期待」は、「その人をわかろうと近づいてきてほしい」というのは医師より看護師に対しての気持ちが強い」「看護のほうにもっと寄り添ってほしいと思っている」「看護のほうに患者の味方になってほしいという気持ちが強い」など看護への期待の強さが述べられていた。「演技時の気持ちの動き」は「看護のほうに気持ちがよく見えてくるというか、すごく動く」、「フィードバック時の不安」では「看護の場合はこれでよかったのかという落ち込みや反省が多々ある」など、看護への期待とともにそれによって心理的な影響を受けやすい場面が多いことが示唆された。

②次に SP の心身の負担感を明らかにすることを目的に、平成 22・23・24 年度 OSCE 終了後に自記式アンケート、および OSCE 前後に実施した POMS (気分プロフィール検査) 日本語短縮版、および生理的指標 (収縮期血圧、拡張期血圧、脈拍、唾液アミラーゼ) の調査を実施した。

札幌市立大学の看護 OSCE は、4 学年を対

象に全 13 課題を実施しており、延べ 60 名の SP が参加している。SP の参加課題数は最少 1 課題、最大 3 課題であり、平均 2.7 課題である。

調査の結果、OSCE 実施前後において生理的指標（脈拍、血圧、唾液アミラーゼ）には有意差はなかった。しかし、どの指標も普段の値より高い傾向があった。POMS は、T-A 緊張・不安 ($p=.001$)、A-H 怒り・敵意 ($p=.034$)、V 活気 ($p=.003$) が OSCE 後に低下した。OSCE 前には緊張が強く、終了後は OSCE の参加によってエネルギーを使い果たした状態であると推察される。以上の結果より、SP にとって看護 OSCE は満足感をもたらすものではあるが、心身への負荷がかかることが確認された。また、OSCE 終了後に実施した質問紙調査の結果、演技やフィードバックに対する難しさ、負担感、身体的疲労感、精神的疲労感について年度間の差はなかったが、上昇傾向であった(図 2)。達成感には平成 24 年度には下降傾向であるが、満足感には上昇していた。これまでの調査からも演技やフィードバックの難しさは年々高まる傾向が指摘されており、それにより負担感が高まることも報告されている(阿部恵子他：2007)。本調査においても同様の結果であった。一方、満足感には上昇していることから、SP としての役割に難しさを感じ負担感があるものの、OSCE は満足感をもたらす体験であることが示唆された。これまでも SP の負担を考慮して 3 日連続にならないように調整したり、1 ステーションを 2 名から 3 名の SP で対応するように配慮している。教員は、今 SP の心身の状態を確認し、配慮しながら OSCE や授業への協力を得ていくことが重要である。

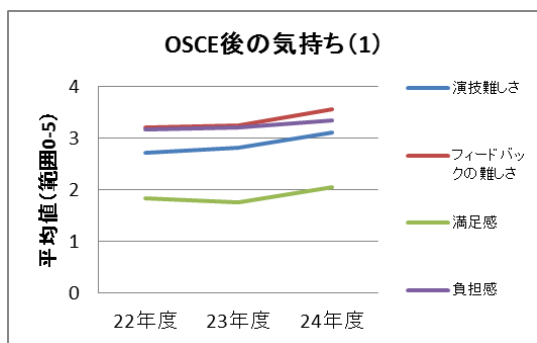


図 2. OSCE 後の気持ち

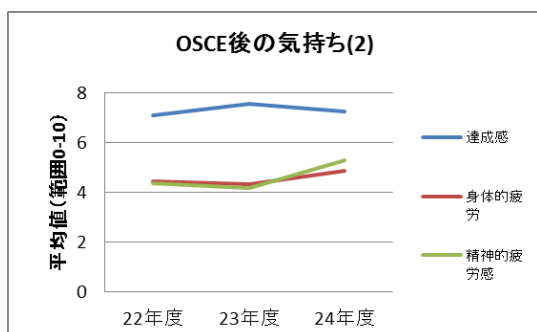


図 3. OSCE 後の気持ち

さらに技術の違いによって負担感、恐怖心、不快感、身体的疲労、精神的疲労の違いがあるかを検討した。その結果、問診などのコミュニケーション技術に比べて、身体接触を伴う診察技術・看護技術において恐怖心が高いことが分かった ($p=.001$)。医学教育と看護教育において最も異なることは、SP が看護技術を受けることにある。この結果から、恐怖心を抱くことのないよう、安全な技術を提供することが重要である。参加型授業や OSCE は、実践的に看護を学べる学習方略であるが、学生が十分に練習をしないままに SP に看護技術を提供することは、患者への配慮という点でマイナスの影響を及ぼしかねない。事前にシミュレータや学生同士のロールプレーで練習したうえで SP との学習に臨むことが SP への配慮として重要なことである。また、万が一 SP が恐怖心や不快を感じた場合は、授業や OSCE の途中でであっても申し出ることができることを事前の説明しておくこと、教員が危険と判断した場合も進行を止めることが重要である。さらに、心理的な負担感を軽減するためには、OSCE や授業直後に振り返りをして感情や気持ちを吐き出すこと、また、時間をおいて反省会や学習会をすることが SP の気持ちを整理するうえで効果的な方法である。

以上より、SP へのインタビューから看護教育への期待とともに、心理的な負担感を感じていることが示唆された。さらに、身体接触のある看護技術はコミュニケーション技術に比べ SP にとって恐怖心をもたらすことがあったことから、看護教育における SP 養成や OSCE・授業においては、教員はこれらの負担感や安全を十分に考慮して SP を支援することが重要である。

札幌市立大学における模擬患者養成講座は、図 1 に示すとおり、入門コースとフォローアップコースを 1 年半かけて段階的に実施した。その結果、28 名の SP が誕生した。講座中に 3 回の意思確認を行う中で、約半数の受講者が辞退した。活動を開始して 1 期生が 4 年、2 期生が 3 年経過したが、脱会者は 3 名のみであり、その 3 名も家庭の事情であった。約 90% の SP が活動を継続している理由は、1 年半という長い期間をかけて養成したことが影響していると推察する。1 年半かけた理由は、①受講者が様々な背景を持った一般市民であることから、SP が看護教育に携わることの意義を理解することが必要であること(教育者ではなく、あくまでも市民としての協力者)、②実践的な練習や教育現場(SP 参加型授業・OSCE)の見学を通して、大学の教育理念や看護教育における模擬患者の役割を理解すること、③SP の活動によって生じる心身への負担を自分で判断して意思

決定できるようにするためである。これらの内容を長期間にわたってプログラムとして展開したことが脱会者が少ない理由であると考えられる。

以上より、札幌市立大学の模擬患者養成プログラムは看護教育に携わる SP を養成するうえで有効なプログラムであると評価する。(3) SP のスキルアップおよび継続した活動を支援するために学習会等を企画した。SP は演技やフィードバックに困難を感じている(図 2) ことから、スキルアップを図りそれにより満足感や達成感を持てることで活動の継続につながっていくと考える。また、SP が所属する会の中だけで活動することは慣れや自己満足に陥る危険性があることが報告されている。これらの課題を解決するために、①定例学習会(年 3 回)、②他機関の講師による特別学習会(年 1 回)、③他機関の SP・教員との学習交流会(年 1 回)、振り返りの会(年度末)、SP の自主活動を促進するため支援を検討し企画運営した。さらに平成 24 年度は教員と SP による FD (Faculty Development) 研修会を企画し、OSCE シナリオの評価を行った。

アンケートの結果より定例の学習会は「定例学習会の回数は適切である」88.3%、「技術を高めるうえで効果的である」83.6%、「活動継続への効果的である」86.9%であり、定期的な学習会は SP のスキルアップおよび活動を継続するうえで意義ある支援であると考えられる。自由記述の中で「改めて自分の SP としての慣れになっている部分を再確認できた」「年数がたって、教員と SP の役割の違いや SP の応答の仕方などが理解できるようになった」などが記載されていた。特別学習会や他機関の SP との交流について自由記述より「新たな発見が多い」「いい振り返りになる」「他の団体の SP と活動について話し合えて有意義であった」「役割を再確認できた」など、他の SP から刺激を受けたり、役割を改めて振り返る機会となっていた。以上より、学習会は SP にとってスキルアップするうえでも活動を継続するうえでも重要な支援であることが示唆された。

さらに SP と教員との FD や交流会については、SP 全員が「今後の授業・OSCE に役に立つ」「今後の活動に活かせる内容」「満足感」と答えていた。自由記述では「有意義だった」「励みになった」「毎年開催してほしい」「フィードバックについてともに語りあえてよかった」などの気持ちが記載されていた。教員のアンケートの結果においても全員が「今後の授業・OSCE に役に立つ」「SP の理解を深める機会となった」と答えていた。自由記述では「SP の気持ちが理解できた」「授業や OSCE で改善すべきところが明確になった」「次年度のシナリオに役立つ」、また複

数の教員が「SP の気持ちがわかった」「次年度もこのような機会を希望する」と述べていた。先行研究(阿部恵子他:2007)より SP が満足を得られない要因として医療者のあり方に対することが挙げられていることから、SP が満足して活動を継続するためには、教員との学習や交流の場をもつことが有効であり、教員にとっても SP への理解が深まることは SP 参加型教育をより効果的なものにしていくために重要な機会であると考えられる。

また、スキルアップのためには、教員による支援だけではなく、自主的な活動をする必要であると考え、自主学習ができる環境を整えた。その結果、平成 23 年度には会の名称とロゴマークが決まり、平成 24 年度から自主学習会が月 1 回で開催された。具体的内容は図 4 に示す。

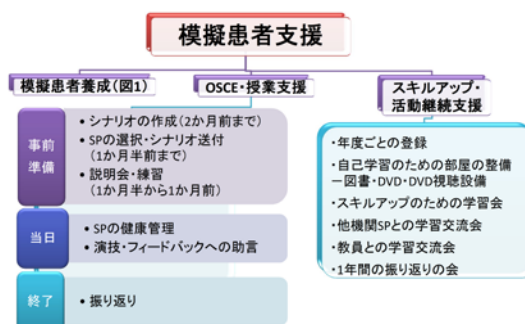


図 4. 札幌市立大学における模擬患者支援

(3)以上述べてきたように、模擬患者養成から 6 年間経過し、最初の 3 年間は SP を養成し、その後の 3 年間はスキルアップと継続的な活動のための支援を行ってきた。これらの活動には 5 名前後の教員が担当者として中心的に関わった。その結果、模擬患者養成およびその後の活動への支援内容は抽出できた(図 4)。本研究の成果は、これまで SP 担当教員が中心に行ってきた支援を土台として、平成 25 年度から SP への支援が大学の教務委員会活動に組み込まれ、SP 班として位置づけられるようシステムを構築したことにある。大学の委員会組織として位置づいたことは、今後も大学として SP 養成と支援が継続されていくことを意味する。これは、SP の大きな安心感につながることであり、強力な活動の支援方法であるといえる。今後はこのシステムの検証が課題となる。

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- ①山本勝則, 守村洋, 河村奈美子: 精神看護学におけるシミュレーション教育の概観と実践—精神看護学トリアル OSCE から構造化されたシミュレーション教育への移行—, 札幌市立大学研究論文集, 査読有, 第 7 巻 1 号, pp.53-59, 2013.

- ② 瀧本雅昭, 渡邊由加利, 山本勝則, 吉川由希子, 工藤京子:「看護基礎教育における模擬患者養成プログラムの実際とその検証」札幌市立大学研究論文集, 査読有, 第6巻1号, 査読有, pp. 3-10, 2012.
- ③ 渡邊由加利, 工藤京子, 山本勝則, 吉川由希子, 瀧本雅昭:「OSCEにおける模擬患者への支援と模擬患者によるフィードバック」看護展望 36 巻6号, 査読無, pp. 27-31, 2011年.
- ④ 渡邊由加利, 中村恵子, 吉川由希子:「大学において模擬患者をいかに活用するか—OSCEを中心に—」看護教育第52巻8号, 査読無, pp. 586-592, 2011年.
- ⑤ 中村恵子, 渡邊由加利:「看護版 OSCE のための模擬患者教育」看護教育第52巻7号, 査読無, pp. 528-534, 2011年.

[学会発表] (計3件)

- ① 山本勝則, 守村洋, 河村奈美子:「精神看護におけるシミュレーション教育—看護学生の患者イメージと態度への影響—」日本精神保健看護学会第22回学術集会, pp.140-141, 2013年6月24日, 熊本
- ② 渡邊由加利, 工藤京子, 瀧本雅昭, 吉川由希子, 須田恭子, 山本勝則, 中村恵子:「看護 OSCE 実施前後における模擬患者の心身の状態に関する研究」第30回日本看護科学学会学術集会, 査読有, 331頁, 2010年, 12月4日, 札幌
- ③ 瀧本雅昭, 渡邊由加利, 工藤京子, 須田恭子, 吉川由希子, 山本勝則, 他:「3年次成人看護 OSCEO における模擬患者の心理・身体的疲労に関する研究」第30回日本看護科学学会学術集会, 査読有, 332頁, 2010年, 12月4日, 札幌

[図書] (計1件)

- ① 渡邊由加利, 吉川由希子, 須田恭子, 工藤京子, 瀧本雅昭, 山本勝則, 他 メヂカルフレンド社, 看護 OSCE, pp56-59 100-115, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡辺 由加利 (WATANABE YUKARI)
札幌市立大学・看護学部・講師
研究者番号: 1031008

(2) 研究分担者 ()

研究者番号:

(3) 連携研究者

山本 勝則 (YAMAMOTO KATSUNORI)
札幌市立大学・看護学部・教授
研究者番号: 10240087
吉川 由希子 (YOSHIKAWA YUKIKO)

札幌市立大学・看護学部・准教授

研究者番号: 50269180

工藤 京子 (KUDOU KYOUKO)

札幌市立大学・看護学部・助教

研究者番号: 80452994

中村 恵子 (NAKAMURA KEIKO)

札幌市立大学・看護学部・教授

研究者番号: 70255412

大瀧 一博 (OHBUCHI KAZUHIRO)

(H23→H24)

札幌市立大学・看護学部・講師

研究者番号: 90249730

須田 恭子 (SUDA KYOUKO)

(H22)

札幌市立大学・看護学部・准教授

研究者番号: 90514399

瀧本 雅昭 (FUCHIMOTO MASA AKI)

札幌市立大学・看護学部・助教

研究者番号: 00452996

(H22→H23 まで)